

RULE



アクア
イラスト/まりも

RULE

目次

序章	3
第 1 章	23

「はっ、はっ」

キルタがマウレタニアより少し離れた場所に位置するアルニルで朝から剣を振るい続けていた。
「よし、ここまでだ」

昼になり、素振りを終えたキルタは森の中を歩き出した。

「……ん？」

しばらく歩いていると、モンスターの気配を感じた。目を凝らすと、モンスターであるスライム、ゴブリン、ウルフ、大蜘蛛が現れた。

「現れたな」

キルタが剣を構えると、スライムはキルタに体当たりをした。

「くっ」

キルタは体当たりを喰らい、よろけて、その場に膝をついた。

スライムはキルタに追い討ちをかけるように、体当たりをした。

「うおお」

キルタは立ち上がると、スライムに剣を振り下ろした。スライムは真つ二つに斬られた。

4 序章

「よし」

スライムがキルタに倒されると、大蜘蛛が口から糸を吹き出し、キルタの体に糸を絡めた。

「うわっ」

キルタが体に絡まった糸を取ろうとすると、ゴブリンは棍棒で、ウルフは牙や爪でキルタを攻撃した。

「うっ、くっ」

キルタの体に沢山の痣や切り傷ができた。

「うおおっ」

キルタは痛みを堪えながら剣を振り上げて、体に絡まった糸を切ると、そのままゴブリンとウルフを斬りつけた。

ゴブリンとウルフはキルタに斬りつけられ、血を吹き出しながら真つ二つに裂けた。

「よし」

ゴブリンとウルフがスライムに倒されると、大蜘蛛は口から糸を吹き出し、キルタの体に糸を絡めようとした。

「おっと」

キルタは大蜘蛛が口から吹き出した糸を避けると、大蜘蛛に剣を振り下ろした。大蜘蛛は真つ二つに斬られた。

5 序章

「よし」

キルタはモンスターであるスライム、ゴブリン、ウルフ、大蜘蛛を倒した。さすがに疲れたので、休憩したくなり、

「休憩するか」

と言って、剣を地面に突き立て、切り株に座って休んで、

「ふう、疲れた」

と一息をついた。

「傷を治すか」

と言って、マントの中に持っていた袋の中から薬草を取り出しそれを体にできた傷に当てると、傷はみるみるうちに治っていった。

キルタはマウレタニアに住む剣士である。マウレタニアから少し離れたアルニルで毎日、毎日剣の修行に励んでいる。剣の修行は剣の素振りとアルニルに出没するモンスターであるスライム、ゴブリン、ウルフ、大蜘蛛との戦闘である。

「さあ、休憩は終わりだ」

キルタは立ち上がると、地面に突き立てた剣を引き抜き、剣を構えた。

キルタが剣を構えてしばらくすると、前方から誰かが来た。

「あなた、なかなかの剣の腕前と見たわ」

6 序章

「誰だ、女か」

「私はアクア。女剣士よ」

「アクア、女剣士か。俺はキルタ、剣士だ」

「アクアはキルタの目の前で立ち止まると剣を構えた。

「キルタ、私と勝負よ」

「俺に勝負を挑むのか」

「ええ」

「アクアは、不敵な笑みを浮かべた。

「何だ、その不敵な笑みは！俺に勝てると思っているのか！」

「ええ！」

「何だと！」

「女剣士だからといって甘く見ないほうがいいわよ！」

「くっ」

「アクアの気迫に押されるキルタにアクアは、

「ふふ」

と笑い声を上げた。

二人はしばらく剣を構えたまま、しばらく見つめ合った。

7 序章

「さあ、かかって来なさいよ！」

アクアは威勢よく叫んだ。

キルタはアクアの威勢の良さに圧倒されたのか、アクアに攻撃することができなかった。

「来ないなら、私から行くよ」

キルタがかかって来ないならばと、アクアはキルタに向かって走り出して剣を振り上げた。

「やあっ！」

キルタに向かって剣が振り下ろされた。

「くっ」

キルタが剣でアクアの剣を受け止めると、アクアは、

「ふふ」

と笑い声を上げた。

(こ、この女)

キルタはアクアの剣を受け止めたまま一步を踏み込み、右の蹴りを放った。

「はっ」

「おっと」

アクアはさっとかわして距離をとって、

「ふふ」

8 序章

と笑い声を上げた。

(こ、この女)

キルタはアクアがただものではないということ、その身にまとう気配から敏感に感じ取った。
「俺をなめるなよ！」

キルタはアクアに馬鹿にされたような気分になり、逆上してアクアに向かって走り出して剣を振り上げた。

「うおおっ！」

アクアに向かって剣が振り下ろされた。

「きゃっ」

アクアは剣を横にして、キルタの剣を受け止めたが、剣撃に耐えられず、剣ごと吹っ飛ばされて、倒れた。

「はあはあ」

キルタは息を切らした。力いっぱい剣を振り下ろしたからだだった。

「男の馬鹿力ね」

アクアは起き上がると、

「ふふ」

と笑い声を上げた。

9 序章

(こ、この女)

キルタはアクアを睨んだ。

「私をふっ飛ばしてくれたお礼をしてあげるわ」

「何」

アクアは手のひらを上に向けた。

「何だ」

キルタがアクアの手のひらを見ると、アクアの手のひらに水がどんどん集まっていく。

「ウォーターソード！」

アクアが剣に水を宿らせた。アクアの剣が水の色になった。

「これは」

「行くわよ」

アクアはキルタに向かって走り出して流れる水のように斬撃を繰り出した。

「流水剣！」

「くっ」

キルタはアクアの流水剣を受け止めようと剣を突き出したが、あえなく剣を弾き飛ばされた。

「しまった」

「はい、そこまで」

アクアは無手となったキルタの目の前に剣先を突きつけた。勝負は決まったと言わんばかりだ。「ま、参った」

キルタはなすすべもなく降参した。アクアはキルタが降参したのを確認してから剣を鞘に収めた。

「私の勝ちね」

アクアは勝利を宣言した。同時にキルタの弾き飛ばされた剣が、遠くの地面に突き刺さった。(こ、この女、水を操るのか)

やはりただものではなかったとキルタは実感した。

「くっ」

キルタはアクアに負けたのが悔しかった。

「私に負けたのが悔しかったら、今よりもっと強くなるといいわ」

キルタはアクアに勝つためには今よりもっと強くならなければならない。今のままではアクアに勝てないと思った。

「アクア、俺は今よりもっと強くなる。次は負けないからな！」

とキルタはアクアに向かって叫んだ。

「あなたに負けたくないわ」

とアクアはキルタをライバル視した。

しばらくキルタとアクアが向かい合って立っているだけの時間が続くと、

「ねえ、キルタ、知ってる？ 虹の紋章」

「虹の紋章？ 知らないな」

「知らないの、虹の紋章は聖なる心の持ち主が揃えると、奇跡を起こす、邪悪な心の持ち主が揃えると、世界は破滅するという掟がある七色の紋章なの」

「へえ」

「見せてあげるわ」

アクアは持っている虹の紋章の一色をキルタに見せた。

「これは、水色。虹の色か」

「そうよ」

虹の紋章の色は虹の色である赤、オレンジ、黄色、緑、水色、青、紫の七色である。アクアはその中の一色、水色を持っている。

「私、虹の紋章を狙っているの」

「何のために？」

「奇跡を起こして、願いを叶えるためよ」

「奇跡を起こして、もしも願いが叶うのならどんな願いを叶えるのだ？」

「それは秘密よ」

12 序章

「そ、そうか」

「残り六色。ここに一色でもあればいいけど、ないよね？」

「残念ながらここには、虹の紋章なんてものではないな」

「そう」

アクアはキルタに背を向け立ち去ろうとした。

「虹の紋章を探しに行くのか」

「ええ」

アクアは背を向けて歩き出した。

「キルタ、また、会いましょう」

と言って、立ち去った。

（水を操る女剣士、アクア）

キルタはアクアの背中をじっと見つめていた。

「さあ、そろそろ帰るか」

キルタはアクアに弾き飛ばされた剣を拾うと、アルニルを出て、マウレタニアに帰って行った。

翌日、キルタはアルニルで剣の修行をしていた。剣の素振りをしていると、近くから、きゆう、

きゆうと鳴き声が聞こえた。

「何だ」

キルタは鳴き声が聞こえるほうへ向かった。そこには怪我をしている小さな翼竜がいた。

「翼竜だ。酷い傷だな」

翼竜の傷はアルニルに出没するモンスターであるウルフに噛まれたものであった。

キルタは翼竜を片手で抱くと、剣を地面に突き立て、切り株に座った。

「俺が葉草で傷を治してやるからな」

と言って、マントの中に持っていた袋の中から葉草を取り出しそれを翼竜の体にできた傷に当てると、傷はみるみるうちに治っていった。

翼竜は飛び回り、傷を治してくれてありがとうと言わんばかりに、キルタの肩に乗り、顔を舐めた。

「おお、飛べるようになったか。良かったな」

「きゆう、きゆう」

翼竜はキルタになつくようになった。

「はは、すっかりなつかれてしまったな」

「きゆう、きゆう」

「そうだ、おまえに名前をつけてやらないといけないな」

キルタは翼竜の名前を考えた。いくつもの候補を思いつき、一つに絞ることができた。

「よし、ドラゴルだ」

翼竜はキルタに「ドラゴル」と名づけられた。ドラゴンの「ドラゴ」、キルタの「ル」でドラゴルである。

「宜しくな、ドラゴル」

キルタはドラゴルの頭を撫でた。

「さて、剣の修行をするか」

キルタは立ち上がると、地面に突き立てた剣を引き抜き、剣を構えた。

「きゆう、きゆう」

「おまえも付き合うか？」

「きゆう」

「よし！」

アクアに言われたことを、キルタはふと思いつ出した。

——私に負けたのが悔しかったら、今よりもっと強くなるといいわ——
(今より強くならなければ、アクアに勝てない)

キルタはドラゴルと強くなるために一緒に修行した。

「はっ、はっ」

朝から晩まで剣の素振りをし続けた。剣の素振りはいつも朝から昼までしていたが、これからは朝から晩まですることにした。

空が暗くなり、キルタがドラゴルとマウレタニアに帰ろうとすると、前方からウルフが現れた。「現れたな。斬ってやる」

キルタが剣を構えると、ウルフは遠吠えをして仲間を呼び寄せた。

ドラゴルは怒ったような泣き声で、

「きゅー！」

と鳴いた。いや本当に怒ったらしく、ウルフを睨みつけている。ウルフの集団に襲われて傷を負ったからだだった。

ウルフが集団でキルタに襲いかかると、キルタは剣を振り上げた。

ドラゴルはキルタの剣に向かって口から火を吹き、火を宿らせた。

「おお！ 俺の剣がファイアソードになったぞ！ よし！」

キルタは剣を振り下ろした。

「まとめて斬って、燃やしてやるぜ！ 火炎斬！」

集団で襲いかかってくるウルフを次々と真つ二つにして、燃やした。

「これは、すごいぜ。やるな、ドラゴル」

キルタはドラゴルの頭を撫でた。

「きゆう」

ドラゴルはキルタに頭を撫でられて嬉しそうに鳴いた。

アクアが水を操って剣に水を宿らせるなら、翼竜であるドラゴルを操って剣にドラゴルが口から吹いた火を宿らせることでアクアと対等な勝負ができるだろうとキルタは思った。

「待つてろよ、アクア！」

キルタはドラゴルの火が宿っている剣を握りしめた。

剣に宿っていたドラゴルの火が消えると、キルタはドラゴルとアルニルを出て、マウレタニアに帰って行った。

翌日、キルタはドラゴルと剣の修行の旅に出ることを決めた。アルニルで剣の修行をするだけでは強くなれない。剣の修行の旅に出ることにより、色々な場所で色々な人と出会い、様々な困難や、決死の戦いを乗り越えて強くなる。

「今より強くなるために、俺はドラゴルと剣の修行の旅に出る」

キルタは剣を握りしめた。

「きゆう」

飛んでいたドラゴルがキルタの肩に乗った。

「ドラゴル、走るぞ」

「きゆう」

キルタの肩に乗ったドラゴルはしっかりとキルタの肩に爪を立てた。

「ドラゴル、行くぞ」

「きゆう」

キルタはマウレタニアを出て走って行った。

キルタとドラゴルはマウレタニアよりかなり離れた場所に位置するミテイレネを訪れた。しばらく歩いていると、草原で踊り子が踊りを踊っている。

「踊り子だ」

キルタの眼前で、踊り子は軽やかに舞う。あちら向き、こちら向き、やわらかな薄絹をひるがえして蝶のように舞う。

「きれいな踊りだ」

キルタは草原に咲いている花を摘んで、花束を作り、踊り子に近寄った。

「やあ」

「あなたは？」

踊り子は踊るのをやめてキルタのほうを向いた。

「俺は、キルタだ。マウレタニアの剣士だ」

「キルタ、マウレタニアの剣士ね」

「ああ。これをきみに」

キルタは踊り子に花束を渡した。

「まあ」

花束を受け取った踊り子の表情は、花束に負けないほどのステキな笑顔だった。

「きみの踊りに見とれてしまっただね」

「ありがとう。私はオステイア」

オステイアは嬉しそうに花束を抱えている。

「オステイア、いい名前だ」

「あなたは旅をしているのね」

「ああ、剣の修行の旅をしているのだ」

「剣士だから強くなろうとしているのね」

「ああ」

「あら、あなたの肩に可愛い翼竜が乗っているわね」

オステイアはキルタの肩に乗っているドラゴンを見て言った。

「きゆう」

ドラゴルはオスティアに可愛いと言われて嬉しかったのか、キルタの肩からオスティアの肩に飛び移って、オスティアの顔を舐めた。

「きゃっ、くすぐったいわ」

オスティアは笑いながら言った。

「俺の相棒、ドラゴルだ。宜しくしてやってくれ」

「ドラゴル、宜しくね」

オスティアはドラゴルの頭を撫でた。

「きゆう」

ドラゴルはぱたぱたと翼を動かして嬉しそうに鳴いた。

「私、ミティレネを訪れる人に踊りを披露し、金稼ぎをしているけれど稼ぎが少ないので、貧しい生活をしているの」

オスティアが住むミティレネは貧困な村だ。そのためオスティアは貧しい生活をしている。オスティアは何かミティレネの貧困を救おうとしているが、時間がかかる。

「そうか」

キルタに虹の紋章を何のために狙っているのかと問われたアクアが答えたことを、キルタはふと思い出した。

——奇跡を起こして、願いを叶えるためよ——

(そうだ。虹の紋章を揃え、奇跡を起こして、願いを叶える)

虹の紋章を揃えたら、ミティレネの貧困を救えるかもしれないと思ったキルタはオステイアの顔を見て言った。

「オステイア、虹の紋章を揃えよう」

「虹の紋章とは何かしら？」

キルタはアクアから聞いた虹の紋章のことをオステイアに教えた。

「虹の紋章は聖なる心の持ち主が揃えると、奇跡を起こす、邪悪な心の持ち主が揃えると、世界は破滅するという掟がある赤、オレンジ、黄色、緑、水色、青、紫の七色の紋章だ」

「そうなのね。キルタと私が揃えたら、奇跡を起こすことができるかしら」

「できるさ。俺とオステイアは聖なる心の持ち主だからな」

「ふふ、そうね」

オステイアはキルタの言うことが本当ならば、虹の紋章を揃えたら、ミティレネの貧困を救えると確信した。

「キルタ、私、虹の紋章を揃えて、ミティレネの貧困を救おうと思う」

「ああ」

「きゆう、きゆう」

ドラゴルは力を貸すよと言わんばかりに力強く鳴いた。

これから虹の紋章を揃えるために世界中を駆け巡らなければならない。ドラゴルが成長したら竜くらいになり、人を乗せて空を飛べるようになる。ドラゴルに乗れば、飛行をすることで行動範囲が広くなる。アクアと対等な勝負をするためにもドラゴルの力は必要だとキルタは思った。

「ドラゴル、力を貸してくれよ」

「きゅう」

ドラゴルはオスティアの肩からキルタの肩に飛び移った。

「ドラゴルがいたら心強いわね」

「ああ」

「キルタ、ここで待っていて。私、この花束を家に持って帰って、またここに来るわ」

「ああ、ここで待っているよ」

オスティアは家に帰ると、花束をきれいにドライフラワーにして飾った。そしてすぐに家を出て、キルタの待つ草原に向かった。草原に着くと、待っていたキルタに声をかけた。

「待たせたわね、キルタ」

「オスティア、さあ、虹の紋章を探しに行こう」

キルタはオスティアと虹の紋章探しにミティレネを出た。これから先、虹の紋章を狙っているアクアと争うことになるだろう。



第一章

キルタはオスティアと虹の紋章を求めて歩いてきた。

オスティアがキルタを見上げて、

「虹の紋章って、どこにあるのかしら？」

と訊ねると、キルタは、

「うーん、世界のどこかにあるのだろうか」

と首をかしげながら答えた。

「この広い世界を歩き回らないといけないのね」

オスティアは気が遠くなりそうになりながらそう言った。

（アクアは俺に見せた虹の紋章をどこで手に入れたのだろうか。今もどこかで虹の紋章を探しているのだろうか）

キルタはアクアを思い出し、虹の紋章を求めることで、アクアとの虹の紋章の争奪戦を強いることになることを覚悟した。

オスティアがキルタを見上げて、

「何を思い出しているの？」

と訊ねると、キルタは、

「アクアだ」

と答えた。

「アクアってどんな人なの？」

オスティアはキルタにアクアのことを聞いた。

「水を操る女剣士だ。剣の修行をしていたら、勝負を挑まれて、俺は負けてしまった」

キルタはオスティアにアクアのことを話した。

「キルタより強い剣士がいるのね」

「ああ、だから俺は剣の修行の旅で強くなる。そして、アクアに勝つ」

キルタは持っている剣を強く握り締めて言った。

「アクアも虹の紋章を探しているのかしら？」

オスティアは首をかしげて言った。

「ああ、しかも、ひとつ持っている」

キルタは頷いて言った。

「そう。私たちが虹の紋章を揃えるためにはアクアと戦わないといけないということね」

「そういうことだ」

「アクア、強そうね。でも、私たちにはドラゴルがいるから心強いわね」

オステイアがキルタの肩に乗っているドラゴルの頭を撫でながら言うと、ドラゴルはオステイアに頼りにされて嬉しそうに鳴いた。

「アクアが水を操るなら、俺はドラゴルを操る」

「キルタ、ドラゴルと共に戦えばアクアに勝てるわ」

「ああ」

「アクア、会ってみたいわね」

「俺と一緒にいたら、会えるさ」

キルタとオステイアはアクアの話をしながら歩を進めた。

キルタと別れたアクアは虹の紋章を求めて四大精霊使いと四大精霊が住む森を歩いていた。だが、アクアは四大精霊使いと四大精霊のことはまだ知らなかった。これから知ることになる。

（虹の紋章、ここにあるかな）

アクアが虹の紋章を探していると、「ここで何をしている」と背後から四人の魔法使いに声をかけられた。

アクアは四人の魔法使いの声に振り向いて、

「あなたたち、何者なの」

と言った。

「我々はマジシャン四、主に仕える者だ」

四人の魔法使いは声を揃えて言うど、

「俺はフアヘルだ」

「私はウオティア」

「私はウインダよ」

「僕はアース」

それぞれ名乗った。

フアヘルは火の魔法使い、ウオティアは水の魔法使い、ウインダは風の魔法使い、アースは土の魔法使いである。四大元素である「火」「水」「風」「土」の魔法をそれぞれ使う四人の魔法使いから『マジシャン四』と呼ばれる。生まれながら持つ魔力は四大精霊の魔力と互角だと言われている。

「フアヘル、ウオティア、ウインダ、アースね。私はアクアよ」

アクアは名乗り返した。

「アクアか。ここで何をしている」

フアヘルはウオティア、ウインダ、アースよりも一歩踏み出して前に出て来て言った。

「虹の紋章を探しているの」

「そうか。我々も虹の紋章を探している。主のために」

「主って」

「アマツミカボシさまだ」

アマツミカボシは世界を一度滅ぼし、悪に染まった世界を創造しようとしている悪である。世界を一度滅ぼすため、虹の紋章を揃えようとしている。「マジシャン四」と呼ばれているファヘル、ウオティア、ウインダ、アースの主である、

「虹の紋章を揃えて、世界を一度滅ぼし、悪に染まった世界を創造？ ふふっ、愚かな主ね」

アクアはアマツミカボシのしようとしていることが愚かなことだと思い、笑いながら言った。

「アマツミカボシさまが愚かだろうと、我々はアマツミカボシさまのために、虹の紋章を揃える」
ファヘル、ウオティア、ウインダ、アースは声を揃えて言うと、ファヘルは持っている赤色の虹の紋章を、ウオティアは持っている青色の虹の紋章を、ウインダは持っている緑色の紋章をアクアに見せつけた。

「あ、あなたたち、虹の紋章を持っているのね」

「ああ、アマツミカボシさまも虹の紋章をお持ちだ。紫色の虹の紋章だ」

「……」

アクアは探している虹の紋章の七色のうち四色を既に自分以外の者が見つけたことに驚いて黙ってしまった。

「おまえも虹の紋章を持っているのか」

「ええ」

アクアは持っている水色の虹の紋章をファヘル、ウオティア、ウインダ、アースに見せつけた。
「ふふっ、互いに虹の紋章を持っているとは面白い」

ファヘルは笑いながら言った。

(アマツミカボシ、ファヘル、ウオティア、ウインダ、アース、邪悪な心の持ち主だわ)

アクアはアマツミカボシ、ファヘル、ウオティア、ウインダ、アースが邪悪な心の持ち主だと感じて、虹の紋章を揃わせてしまうと、危ないと危惧した。

「もうこの場所に用はない。そろそろアマツミカボシさまの元に戻るぞ」

ファヘルが撤退しようとアクアに背を向けると、ウオティア、ウインダ、アースも撤退しようとアクアに背を向けた。

「待ちなさい！ あなたたちをアマツミカボシの元に戻らせないわよ！」

アクアは強い口調でそう言い、撤退しようとしたファヘル、ウオティア、ウインダ、アースを足止めした。

「アクアに構うな。撤退するぞ」

ファヘルがそう言うと、アクアは鞘から剣を抜いた。

「俺たちを斬るのか」

ファヘルは首だけアクアに振り向いて言った。

「ええ」

アクアは剣を構えて言った。

「俺たちを斬ってどうする」

「あなたたちを斬って虹の紋章を奪うわ。邪悪な心の持ち主であるあなたたちに虹の紋章を揃わせるわけにはいかないからね」

アクアはファヘル、ウオティア、ウインダ、アースに剣を向けて言った。

「アクアは私が相手するから、あなたたちは先にアマツミカボシさまの元に戻るのよ」

ウオティアがそう言うと、ファヘル、ウインダ、アースはウオティアを見て頷いた。

「ウインダ、アース、アマツミカボシさまの元に戻るぞ」

ファヘルがそう言って、ウインダ、アースと撤退しようとしてウオティアに背を向けると、アクアは「待ちなさいって言っているでしょう！」と強い口調で言いながら、ファヘル、ウオティア、ウインダ、アースに向かって走り出し、剣を振り下ろした。

ウオティアはウオーターウォールでアクアの剣を弾き返した。

「今よ、あなたたちは先にアマツミカボシさまの元に戻るのよ」

と言って、ファヘル、ウインダ、アースを撤退させた。

「くっ、ファヘル、ウインダ、アースを撤退させてしまうなんて」

アクアはファヘル、ウインダ、アースの足止めに失敗した。

「さて、私はアクアの相手をしましょうか」

アクアは間合いを取って剣を構えた。

「ウオティア、あなたを倒して虹の紋章を奪うわ。あなたが水の魔法を使うなら、私は水を操るわよ」

アクアは手のひらを上に向けた。

「あなたが水を操るところを見せてもらおうかしら」

ウオティアがアクアの手のひらを見ると、アクアの手のひらに水がどんどん集まっていく。

「ウオーターソード」

アクアが剣に水を宿らせた。アクアの剣が水色になった。

「なるほど。私を倒して虹の紋章を奪うため、私に水の戦いを挑むのね」

「ええ、流水剣で斬ってあげるわ」

アクアはそう言って、ウオティアに剣を突きつけたが、ウオティアは動じることなく落ち着いている。冷静なウオティアのその姿にアクアは驚きを隠せなかった。

ウオティアはウオーターウォールで防御した。

「あなたに私は斬れないわ」

「それはどうかしら。流水剣！」

アクアはウオティアに流れる水のように斬撃を繰り出した。

「あなたに私は斬れないと言ったはず……うっ」

ウオティアはアクアにウォーターウォールを貫通した流水剣で頬を斬られた。

「流水剣に斬られて動揺したでしょう」

「いいえ」

ウオティアは動じることなく落ち着いている。

(この女、流水剣に斬られてどうして冷静でいられるの)

「私の魔力はこの程度ではないわ。さっきのウォーターウォールの魔力は全力ではないからね」

「何ですって」

「ウォーターウォールの魔力を強くしたら、あなたに斬られなくなるわ」

「それはどうかしら。流水剣！」

アクアはウオティアに流れる水のように斬撃を繰り返したが、ウオティアの魔力を強くしたウォーターウォールに弾き返された。

「くっ」

「今度は私の番よ」

ウオティアはウォーターでアクアを攻撃した。

「きゃああああっ」

アクアは吹っ飛び、木にぶつかって、倒れた。

「くっ、ウオティアの魔法、強力だわ」

アクアは立ち上がりながら言った。

「さっきのウォーターの魔力も全力ではないわよ」

「強力でありながら全力ではないウオティアの魔法、全力ならアクアは倒れたまま、立ち上がれなかっただろう。」

（強いわ、私の流水剣がもう通じない以上、私にウオティアを倒せる可能性はない）

アクアはウオティアに敵わないと感じた。

「あなたを倒して虹の紋章を奪うわよ」

（このまま戦うとウオティアに倒されて、虹の紋章を奪われるわ。隙をついて撤退しなければ）

森の木々の間から太陽の光が差し込んでいる。アクアは太陽の光を剣に反射させてウオティアの目をくらませ、その隙に撤退しようと考えた。

「ウォーターの魔力を強くして、あなたを倒すわ」

ウオティアがそう言って、魔力を強くしたウォーターでアクアを攻撃しようとする、アクアは太陽の光を剣に反射させた。

「うっ」

ウオティアは目がくらんだ。アクアはその隙にウオティアに倒されて虹の紋章を奪われることを回避するために剣を鞘に収めて撤退した。

あたりが見えるようになったウオティアはアクアが撤退したことを確認し、

「撤退したか。まあ、いいわ。私たちが虹の紋章を持っている以上、アクアはまた私たちの前に現れる。その時は必ずアクアを倒して、虹の紋章を奪うわ」

そう言い残して、立ち去った。

キルタは邪悪な心の持ち主の存在を感じた。

(虹の紋章は邪悪な心の持ち主に狙われている)

邪悪な心の持ち主に揃えさせてはいけない、アクアに勝負で勝つだけではなく、邪悪な心の持ち主を倒せるように強くならないといけないと自分に言い聞かせた。

「い、痛たたたた」

アクアが癒しの水でウオティアとの戦いで負った傷を治しながら、歩いていると、前方から四大精霊使いと四大精霊が仰向けに倒れているのが見えた。

「倒れている人と精霊を発見！」

アクアは倒れている四大精霊使いと四大精霊に駆け寄った。

(何者なのかしら)

四大精霊使いと四大精霊を知らないアクアは疑問に思った、

「う、あなた、名前は？」

四大精霊使いが目を覚まして、アクアの名前を聞いた。

「私の名前はアクアよ。あなたたちが倒れているのを発見したから」

アクアは倒れている四大精霊使いと四大精霊の横にしゃがみながら言った。

「アクアね。私はスピイア。サラマンダー、ウンディーネ、シルフ、ノームを召喚する者よ」

スピイアはアクアに名乗り、自己紹介をした。

スピイアはこの森に住む四大精霊使いである。火を司る精霊であるサラマンダー、水を司る精霊であるウンディーネ、風を司る精霊であるシルフ、土を司る精霊であるノームは普段姿を隠して、スピイアによって召喚されると、姿を現す四大精霊である。

(この森には四大精霊使いと四大精霊が住んでいるのね、初めて知ったわ)

「ううっ」

スピイアはサラマンダー、ウンディーネ、シルフ、ノームと立ち上がるうとしたが、傷の痛みで立ち上がれなかった。

「傷を負っているのね。治してあげるわ」

アクアは癒しの水でスピイア、サラマンダー、ウンディーネ、シルフ、ノームの傷を治し、ス

ピエアに何があったのかを聞いた。

「傷を治してくれて、ありがとう。何があったのかを話すね」

スピエアはそう言っつて、サラマンダー、ウンディーネ、シルフ、ノームと立ち上がった。

「ええ」

アクアが立ち上がると、スピエアはアクアに何があったのかを話した。

「この森で穏やかに過ごしていたら、マジシャン四が現れて、「四大精霊を召喚しなければこの森を滅ぼす」と言われて、サラマンダー、ウンディーネ、シルフ、ノームを召喚させられたの。」

「四大精霊の魔力を吸収する」と言われて、そうはさせないとサラマンダー、ウンディーネ、シルフ、ノームと抵抗したら、魔法で傷つけられ、サラマンダーはフアヘルに、ウンディーネはウオテイアに、シルフはウインダに、ノームはアースに魔力を吸収されてしまったの」

「マジシャン四」

「あなた、マジシャン四を知っているの」

「知ってるも何も、さっき、戦ったわ」

「そうだったの。で、倒せたの」

「倒せなかったわ。魔法が強力で敵わなかったからね」

マジシャン四は四大精霊の魔力と互角だと言われている生まれながら持つ魔力を強化するため、四大精霊の魔力を吸収した。魔法が強力なのはこのためだった。



アクアは持っている水色の虹の紋章を見た。

(ウオティアに倒されて、奪われなくて良かった。もし、ウオティアに倒されて、奪われたら、ウオティアはファヘル、ウインダ、アースとアマツミカボシに虹の紋章を揃えさせるために渡すからね)

アクアはアマツミカボシ、ファヘル、ウオティア、ウインダ、アースに虹の紋章を揃えさせないように、持っている虹の紋章は絶対に渡さないようにしなければと自分に言い聞かせて、

「そろそろ行くわ」

と言って、残りの虹の紋章を探しに行こうとすると、

「待って、アクア」

スピイアはアクアを呼び止めた。

「どうしたの、スピイア」

「アクアと一緒にマジシャン四と戦うために、アクアと一緒に行くよ」

アクアはスピイアと一緒にマジシャン四と戦えば、四大精霊の魔法でマジシャン四の魔法に対抗できると確信した。

「私と一緒に行くわよ、スピイア」

「うん！」

サラマンダー、ウンディーネ、シルフ、ノームが姿を隠すと、スピイアはアクアに同行した。

RULE

著 者 アクア

イラスト まりも

発行日 2019年1月12日

メール webaqua@iris.ocn.ne.jp

ウェブ <http://www.webaqua.server-shared.com/>

※無断転載・複製・複写・ウェブ上でのアップロード、
ネットオークション・フリマアプリでの転売禁止。